

NEWS REPORT

ニュースレポート



(写真-1) 第3回ITS世界会議の会場



(写真-3) 展示会の様子
(ミネソタ州のブースにて)



北海道開発局開発土木研究所
防災雪氷研究室長
加治屋 安彦

ITS 国際会議報告

1.はじめに

平成8年10月14日から18日まで、アメリカ合衆国フロリダ州オーランドで、第3回ITS世界会議が開催された。筆者は、北海道からの数少ない参加者の一人として、この会議に参加する機会を得たので、本紙面を借りてその開催状況を報告することとした。

2.会議の全体概要

この会議は、その経済効果や社会に与える影響の大きさから、世界的に関心の高まるITS（高度道路交通システム）に関して、世界各国の産官学の研究者・技術者及び行政官が集まって行われる世界最大規模の国際会議である。

この会議は欧州のITSの推進団体であるERTICO、アジア・パシフィックのVERTIS、北（南）米のITS Americaの持ち回りで開催され、今回は、第1回のパリ会議、第2回の横浜会議に続く第3回の会議として、ITS Americaの主催、ERTICO、VERTISの共催で開催された。VERTISによれば、会議の参加者は全体で約4000名、登録者で見ると日本から600名でそのうち我々のような政府関係者が50名とのことである。

会議の会場となったのは、オレンジ郡のコンベンションセンター（写

真-1）である。ITS世界会議規模のものを4~5個同時に開催できるような全米でも最大規模のコンベンション施設である。この施設に、世界20ヶ国以上からITS技術者、研究者、行政官が集まって、5日にわたり、Traveler Information Systems, Automated Highway Systems, Safety and Traffic Management, Private/Public Partnership, Marketingなどの技術的・話題や経済的・行政的・テクニカルセッションや、スペシャルセッションなどの場で発表討議された。発表論文数は、今回新たに採用されたCD-ROM媒体の講演集に掲載されたものだけで見ても582件にのぼっている。

3.会議や展示会の印象

私自身は、Safety and Traffic Managementのセッションにおいて、「ITS Technology R&D for Winter Traffic and Its Impact（冬期交通のためのITS技術の研究開発とそのインパクト）」と題する発表を行い、「インテリジェント・デリニエータ・システム」をはじめとする冬期道路の安全走行支援システムの研究開発や、「峠画像の伝送実験」をはじめとするインターネット技術を活用した道路情報システムの研究開発の現状について報告し、北海道の地域特性に根ざした

ITS/Win研究計画を紹介した。

また、積極的に各研究発表者と意見交換をするとともに、展示会の視察を行い、高度道路交通システムの先端技術動向の情報収集や交流を行った。

米国では、連邦運輸省長官の提唱による“Operation Timesaver (時間節約作戦)”で、今後10年以内に全米75都市圏にITSの基盤整備を行い、15%の旅行時間の削減を可能にするという。この結果、一人あたりにすると1年で1週間の休暇が出るのに匹敵する時間節約が可能になるという。このように具体的にITSの整備効果を訴えられると非常に分かり易く、また説得力もある。

テクニカルセッションでは、主として積雪寒冷地や気象、地方部のITSなどに関する議論に私は参加した。気象とITSの関係については、独立のセッションが設けられたが、その中で得られた情報は、最近ITS Americaの中に気象専門部会が設けられ、気象機関とITS機関の連携について議論が開始されたということである。

また、国際的にも有名な積雪寒冷地であるミネソタ州では、州のITS計画を策定するにあたり、州内の特に地方部の道路利用者ニーズ調査を広範に行い、特に地方部では冬期の路面や気象、視界条件に関する情報ニーズが高いことを明らかにしている。こうした利用者ニーズ調査の結果から、考えられるプロジェクトを絞り込み、短期あるいは中・長期的な視点から導入可能性について評価している。

実はミネソタ州については、こうした積雪寒冷地や気象、地方部のITSに対する積極的な取り組みに以前から着目して、私どもの研究室から職員を派遣している(写真一)。

写真一はミネソタ州の展示ブースである。展示会には約140もの団体・企業が出展し、そのうち日本関連の展示は19にのぼった。日本関連のブースはどれも素晴らしいものであり、政府や各企業の力の入れようが目についた。海外からの出展で印象に残ったのは、ミネソタ州の他、連邦道路庁や全米自動運転道路コンソーシアム、ワシントン州、テキサス州、アリゾナ州などである。それにしても、ミネソタ州が連邦道路庁に並ぶほどの規模の大きなブースを出しているのには驚いた。

また、今回の会議では、ITSが時代の先端技術分野ということもあって、多くの発表でインターネットの活用や自組織のホームページを紹介する事例が目についた。

4.全体を振り返って

欧米、特に米国では、ITSをマルチメディアの社会実験、あるいは地域における新たな産業の創出や活性化の観点から取り組んでいると感じられた。そのため、単に技術論だけでなく、社会・経済的観点からの議論も数多くなされている。また、官民パートナーシップの

確立が盛んに行われており、研究開発から実証実験に至るまで密接な連携のもとに技術開発が図られている。我が国では、この点の取り組みが遅れているように思われた。さらに、ITSは国際競争という面も強く、欧米に比べて社会システムとして実証実験が遅れている日本でも早急な取り組みが必要であると感じられた。

冬期交通は、滑りやすい雪氷路面や吹雪等による視界不良といった車の運転には非常に厳しい条件を呈しており、先進の技術を活用して安全な走行を支援したり、高度な情報提供システムを導入することにより、安全性や効率性の飛躍的向上が期待できるITS技術の潜在的インパクトの大きい分野である。ITS世界会議への参加は前回の横浜会議に続いて2回目であるが、今回の参加により、欧米各国のITS技術の進み方を知ることができた。また、各国のITS研究者、技術者と交流を深めることで新しい知見が得られた。今後、このネットワークを生かして、意見交換を深め、多雪地域をかかえる我が国にふさわしいITS技術の研究開発を進めたいと考えている。



(写真一) 会場にて(右が筆者で、中央がミネソタ州に派遣中の松澤研究員、左は熊澤研究員)